

『中世共同体論 ― ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人 ―』

アルフレート・ハーファークンプ著（大貫俊夫、江川由布子、北嶋裕、井上周平、古川誠之訳）

四六判：320 ページ 2018 年 5 月 東京 柏書房

長藤 美佑紀

アルフレート・ハーファークンプ Alfred Haverkamp（トリーア名誉教授）はこれまでユダヤ人史を中心に中世都市社会史研究に従事し、西洋中世史研究の進展に大きく貢献してきた。ハーファークンプは、甚野尚志 早稲田大学文学学術院教授主催（科研・基盤 A「中近世キリスト教世界の多元性とグローバル・ヒストリーの視角」）のもと、2016 年に早稲田大学にて講演会を行ったこともある。本書はハーファークンプがこれまで発表してきた論文の内 7 本を厳選し、日本オリジナルで翻訳・編集した論文集である。本書はその 7 本の論文を以下のような第 I 部、第 II 部、第 III 部に再構成している。

第 I 部 中世都市論の展開

第 1 章 中世盛期・後期における「初期市民的」世界——地域史と都市社会の歴史——

第 2 章 盛期中世の「聖なる都市」

第 II 部 共同体の諸形態と宗教性・公共性

第 1 章 共同体における生活——12 世紀における新旧の諸形態——

第 2 章「大鐘を鳴らして知らせる」——中世の公共性について——

第 3 章 12、13 世紀における兄弟会とゲマインデ

第 III 部 キリスト教社会とユダヤ人共同体

第 1 章 中世アシュケナジム空間におけるキリスト教徒とユダヤ人の「共同市民制」

第 2 章 1090 年までのオットー＝ザーリアー朝における司教とユダヤ人の諸関係

ドイツ中世都市史研究を長年牽引してきたハーファークンプの数ある論考の中から選ばれた上記の諸論文の構成から、本書を通してハーファークンプの持つ中世ヨーロッパの都市共同体の基盤や全体像を公共性、兄弟会、ユダヤ人という観点からより立体的に示そうという編者たちの意図を窺い知ることができる。本稿では中世から近世にかけての公共性に関心を持つ評者の視点から改めて本書を読み解き、中世の公共性について検討したい。なお、文中での本書からの引用は頁数のみを記載することとする。

第 I 部第 1 章ではそれまでの共同体論（1975 年および加筆した 1997 年当時）の研究動向の詳細を再整理した上で、ハーファークンプ自身の共同体論における位置づけが明確に打ち出されている。ハーファークンプは、従来の法制史的観点による領主制的要素（ヘルシャフト）と仲間団

体的要素（ゲノッセンシャフト）をめぐる二項対立の図式で中世共同体を捉えるのは不十分であるとして、新たに「都市民に関する社会史的な分析アプローチ」（20 頁）を提言した。そのような新たなアプローチによる具体的な論証が第Ⅰ部第2章以下の諸論文であるといえるだろう。第Ⅰ部第2章および第Ⅱ部第1～3章では、同時代人の掲げた「聖なる都市（*civitas sancta*）」という観念から、中世における都市共同体の基盤およびその正統性をキリスト教的な聖性に求め、鐘の音が持つ社会的機能が「共同体における公共性の起源」（181 頁）になったとした。また、こうした都市共同体に多数存在した兄弟会は宗教的な基盤を持ち、「修道院と並んで、あるいはそれと協調することで、都市共同体の宗教生活のきわめて重要な導き手・まとめ役」（233 頁）となり、「都市共同体の内部における『信仰の多様性』（*diversitas religionum*）」と、それにともなう宗教的な『市場機会』の向上に貢献」（233 頁）した。続く第Ⅲ部ではこうした中世の都市共同体におけるユダヤ人に対する新たな意味づけを行っており、ユダヤ人やユダヤ人共同体は自然かつ強固に都市生活のなかに根づいていたことを明らかにした。また、ユダヤ人はキリスト教徒と「同じ場にあって『市民性』（*civilitas*）（市民権と原則的平等）に基づいた共生」（267 頁）を模索・実現しており、ユダヤ人共同体とキリスト教徒の都市共同体との間には密接な双務関係があったとした。さらに、中世初期のドイツ地域において、司教座都市へのユダヤ人の移住に対する司教の積極的な働きかけを明らかにし、ユダヤ人が「キリスト教世界の中心地、すなわち大聖堂都市の救済史的地位を向上させるもの」（327 頁）としてキリスト教の救済史に必要な存在であったと論じた。このようにして都市の共同市民としてユダヤ人を位置づけた点に、ハーファークンプの持つ共同体像の中で最も独創的な特徴が表れているといえる。

上記で概観したとおり、ハーファークンプの中世の都市共同体像はそれまでの共同体像と異なる様相を呈している。ブリックレやギールケらをはじめとする従来の共同体論者の間では、領主制的要素と仲間団体的要素の二項対立、また両要素の相互性と相関性が議論されてきた。これらはいずれも、共同体における政治的側面に注目したものといえる。それに対し、ハーファークンプは中世社会の形成と変容における宗教的要素の基底的役割に注目し¹、中世の共同体が持つ「キリスト教独自の宗教性と教会主義のなかに、中世にとどまらないそれ以降の時代の公共性の本質的な基盤と発展がある」（164 頁）と主張した。ハーファークンプの描く新たな都市共同体はキリスト教を基盤としたものであり、中世における公共性もそのような基盤を形成・維持する一助として機能していたと捉えることができる。この点において本書は、西洋史学における公共性概念の意義に新しい可能性を提起したといえる。

「公共性」という概念は、ヨーロッパにおける近代化以降の社会の解明にあたってしばしば用いられてきたものである。西洋史学における公共性にまつわる議論はとりわけ近代史以降に集中し、それらの多くはハーバーマスの唱えた「市民的公共性」が基軸となってきた。ハーバーマス

¹ 江川由布子「ドイツ学界における西欧中世共同体論の動向に関する一考察—都市ゲマインデ研究の新たな地平を探って—」『比較都市史研究』29 号、2010 年、27 頁。

は16～17世紀以降の公共性を、市民が理性に基づいた公論を形成することによって政治的主張をする「市民的公共性」と名付けた。ハーバーマスの掲げる公共性とは、「人びとが会議や裁判の形をもとりうる対話（lexis）と、戦争であれ闘技であれ共同の行為（praxis）」²によって「認識可能な公益を創出する場」³であり、齋藤純一のまとめ方によれば、人びとが行為と言論によって互に関係し合うところに創出される空間である⁴。ここから、ハーバーマスの掲げる公共性の根幹はコミュニケーションを通じた合意形成であるといえる。ハーバーマスの公共性の議論は、民主制に基づいた近代市民社会の成長と崩壊の解明を目的としており、主に近代市民社会に特化した「市民的公共性」を対象としている。このようなハーバーマスの議論以降、西洋史学での公共性研究は中世後期以降の社会的転換の結果、公権力とは異なる場での論争による政治参加が発達する近代以降を対象とするようになった。そのため、歴史学をはじめ諸研究分野において「公共性」という概念自体が近代以降の研究用語となってしまうといえる。一方で、ハーバーマスは中世から近世初期における公共性に関して、その存在を認めつつも、それは社会的領域ではなく、封建権力や教会、諸侯、支配者といった社会的地位がさまざまな形で公の場で示され、彼らの支配権を表現していたとし、これを「代表的具現の公共性」と定義づけた⁵。しかしながら、このようなハーバーマスの唱える中近世の公共性モデルは十分な検討によるものとはいえず、西洋中世史研究においてもこれまで多くの批判が寄せられてきた。近代市民社会の検討にあたっては、近代的な公共性へ至る起源や過程を明らかにすることも重要であり、そのためにも中世、とりわけ中世後期から近代にかけての公共性の変容と連続のあり様も考察する必要があるだろう。その点において、本書の中でハーファークンプが展開した中世の公共性に関する議論はその手掛かりとなるだろう。

ハーファークンプは中世の公共性を論じるにあたり、ハーバーマスが市民的公共性の起源に関して「共同体にはわずかなりとも触れていない」（161頁）ことを批判し、新たに共同体における宗教性に着目した。第Ⅰ部第2章によれば、中世における都市は「聖なる都市」を自認していた。この「聖なる都市」の称号は、都市の印章や市壁の門に記した「聖なる」という文言によって可視的に掲げられた。この観念は、建築や宗教儀礼である行列、巡礼、聖遺物崇敬、さらには世俗の法への違反に対する霊的な罰および都市創建神話などによるイェルサレムやローマへの同化といった行為の中にも表れていた。このような「具象化された舞台装置」（69頁）によって、都市は自身の「宗教的な意味連関を誰に対しても明らか」（同）にした。このような方法によって都市は宗教、すなわち神によって保証された正統性を都市内外に明示的に示し、再生産し続け

² ユルゲン・ハーバーマス / 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社、1982年 [Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit - Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft* -, Neuwied (Luchterhand) 1962]、13頁。

³ ハーバーマス前掲書、304頁。

⁴ 齋藤純一『公共性』岩波書店、2000年、39頁。

⁵ ハーバーマス前掲書、17-19頁。

た。つまり、都市当局は宗教的権威を借りて自らの統治を成功裡に導こうとしていたといえる。こうした統治の形態は、都市当局が単体で「お上 *Obrigkeit*」としての統治基盤や正統性を確立する 14 世紀半ば以前においては、自ら積極的に宗教的正統性を掲げることが世俗的な統治の正統性の裏付けを兼ねており、「宗教で正当化された既存の支配構造に入り込んでいく際にも有利な状況をもたらした」(83 頁)。すなわち、都市による聖性の明示的な主張は、都市の政治的な正統性のアピールでもあったことを示している。一方、教会や修道院は「防衛・平和共同体として都市のために聖なる足場」(133 頁)を築くことにより、自身の伝統を守った。この点において、中世盛期の都市の聖性は「当時の社会における正統性を保証する」(132 頁)担保であり、教会・改革修道会と都市ゲマインデは対立関係にあったとする従来の見解は適切とはいえず、むしろ両者は密接な結びつきを持つ共生関係にあったとハーファークンプは主張する。こうして形成された「聖なる都市」という共同体の自意識は都市の印章や市壁を媒介として、「人々の公共のまなざしのもとで (*in public aspectu hominum*)」(169 頁)表現された。このような例として、先述のような宗教行事への都市全体での参加を通して「聖なる都市」の観念は都市の支配集団だけでなく都市住民の間で強化され、受け継がれていったことが挙げられる。同時に「聖なる都市」の観念を共有することを通して、住民はその都市共同体に入っていたと捉えられる。

ハーファークンプはこうした「聖なる都市」という観念を基盤とした都市共同体に、近世以降に続いていく公共性の起源があるとし、多くの都市にあった鐘に着目した。同時代からあった「大鐘を鳴らして知らせる」という鐘にまつわる言い回しには、「公共の場に持ち込む」(152 頁)あるいは「公開する」(同)という意味があった。これというのも、当時の鐘の音には、その音が聞こえる範囲の人びとに彼らの所属する共同体にとって重要なことを知らせ、話し合いを行うために集まる合図となっていたからである。この鐘の音を合図に開かれた集会では「指導的な聖職者や都市共同体の指導的な組織協力のもと、公の場での弁論や一部意見の対立も含む公共の意識形成や意思決定」(170 頁)がなされていた。つまり、鐘の音が共同体の成員間での合意形成のための一種の政治的「コミュニケーションツール」(153 頁)となっていたことが分かる。また、同時代の支配者の多くは、鐘の音の届く範囲が法の有効範囲であると捉えていたことから、鐘の音を共有する範囲が政治の範囲であり、鐘が支配者と民衆を結ぶメディアの役割を果たしていたといえるだろう。言い換えるならば、鐘の音の可聴範囲によって規定される中世の公共性がその共同体の統治領域であったといえる。なお、この集会は「大聖堂イムニテート内にある大聖堂前広場で開催」(170 頁)された。ここから、大聖堂前広場という公の宗教的な場における「人々の公共のまなざしのもとで」創出した聖俗支配者と民衆との相互関係が、都市における公共性をつくり出したといえる。さらに、教会の鳴らす鐘は魂の救済や魔除けの役割をも担っており、鐘は「10 世紀にはとくにキリスト教的な、いわば『洗礼を受けた』メディア」(178 頁)となっていた。こうしたハーファークンプの見解に基づけば、鐘の音は聖性を持つメディアであり、その聖性のおよぶ範囲内において政治的な合意形成の空間と統治領域を生み出していたと捉えられる。したがって、中世における公共性は宗教性が保証するところに創出された空間であり、中世

の都市共同体は宗教を基盤とした範囲がすなわち統治権力およびその正統性の適用範囲であったといえる。

また、ハーファークンプは中世盛期と後期のドイツ諸地域の共同体におけるキリスト教徒とユダヤ人との関係性についても見直しを迫っている。彼は、キリスト教徒の共同体とユダヤ人共同体はそれぞれの形成過程において影響を与え合いながら共存する「共同市民制(*concivitas*)」(266頁)を展開させていたと論じた。この点に、中世におけるアウトサイダーとしてのユダヤ人の排除と包摂に関する新たな見方が提示されたといえる。この「共同市民制」は、ユダヤ人共同体がキリスト教徒の都市共同体へ金銭を支払う協約という法的枠組みによるものである。これによりユダヤ人共同体は、「法的拘束力のある保護」(266頁)と「キリスト教徒からなる閉鎖的な都市共同体への参加」(267頁)を獲得した。また、ユダヤ人とキリスト教徒は、自身の共同体の構造やその形成過程において互いに模倣あるいは同化という形で影響を与え合うなど、密接な相互関係を展開させた。こうしてユダヤ人は「共同市民制」という法的な手法によってキリスト教徒の共同体からの自律と共存を図った。これはユダヤ人の都市におけるいわば生存戦略ともいえるだろう。このユダヤ人共同体の自律性は、中世初期においてユダヤ人が司教を「教会組織上の指導的立場」(320頁)としての司教と呼ぶのではなく、「支配者(*hegemon*)」(同)と呼ぶことにより「ユダヤ人がキリスト教会に服属したように見えるのを回避」(同)したという例からも明らかだ。ここから、中世におけるユダヤ人共同体とキリスト教徒の共同体は、異なる共同体として「協力体制」(282頁)を築き、互いに関連し合いながら並存して一つの都市を形成・維持していたと考えられる。この点において、ユダヤ人は都市の周縁的な存在としてではなく、むしろ都市の主要構成要素であったことが分かる⁶。このようなドイツにおけるユダヤ人の位置づけに関して、14世紀以前の都市ではユダヤ人を「共住者(*concivitas*)」とみなし、ユダヤ人とキリスト教徒の並存や相互規定的な側面を明らかにした近年の研究とも一致する⁷。この位置づけは後の時代にあっても完全に絶えたわけではなく、ルネサンスと宗教改革が隆盛を極めていた時代においてもユダヤ人が一概に迫害や追放の憂き目にあっていたとは言い難く、ユダヤ人への迫害を行わない「親ユダヤ主義(*philosemitism*)」も皇帝の政策や宗教改革者、知識人らの間に存在しており、異宗派や異教徒の緊張に満ちた共存が確認されている⁸。

しかし一方で「共同市民制」による共存は両義的な側面を持つ。ハーファークンプは、キリスト教徒の共同体においてその公共性を創出させる要となっていた鐘の音は「すべての生活領域に

⁶ 江川前掲論文、29頁。

⁷ 古川誠之「周縁民としてのユダヤ・コブレンツの共同体における「内」と「外」」『西洋史論叢』28号、2006年、103-112頁；小田内隆「西欧中世におけるマイノリティの迫害を巡る諸問題－最近の三つの研究から－」『立命館史学』558号、1999年、586-607頁。

⁸ 踊共二「近世ドイツの反ユダヤ主義と親ユダヤ主義－交錯する宗教と政治－」甚野尚志、踊共二編『MINERVA 西洋史ライブラリー100 中近世ヨーロッパの宗教と政治－キリスト教世界の統一性と多元性－』ミネルヴァ書房、2014年、390-409頁。

において、個々の集団の垣根を超える都市全体の公共性にとって最も効果的なメディア」(178 頁)であったとする一方で、このような鐘の音の機能は「ラテン・キリスト教世界に存在し、たいていは非常に規模の小さかったユダヤ人ゲマインデにあてはまらなかった」(同)とし、キリスト教世界特有の機能であったと主張した。このことから、鐘の音が生み出す「集団の垣根を超える」公共性はあくまでキリスト教徒の空間であり、その公共性を同じ都市にいるユダヤ人と共有していたわけではなかったということが窺える。さらに、13、14 世紀以降、ユダヤ人共同体は上述のようなキリスト教徒の共同体との密接な双務関係の中で市民権を取得し、キリスト教徒の市民と法的に同等な市民身分になったが、これによりユダヤ人共同体はキリスト教徒の共同体との「競合にさらされ」(286 頁)、その後「弱体化」(同)した。また、ハーファークンプによれば、いくつかの都市ではユダヤ人共同体に関して都市当局の都合が優先されること、そしてユダヤ人共同体の社会構成に領邦君主や国王が影響を及ぼすという事態も起こるようになっていった。つまり、ユダヤ人共同体とキリスト教徒の共同体との「共同市民制」は一つの都市における異なる共同体の絶え間ないコミュニケーションによる共存を実現したということであるが、これは両共同体が対等になるにしたがい、ユダヤ人共同体はより強力であったキリスト教徒の共同体を前に次第に共同体としての主体性を奪われていくという皮肉ともいえる結果をもたらしたと考えられる。これは、ユダヤ人共同体がキリスト教徒の公共性下に組み込まれていったことを示唆している。したがって、キリスト教徒はユダヤ人をともに都市を構成する協力者として保護していただけでなく、競合関係にある他者としても見做していたといえるだろう。この点は、ユダヤ人共同体がキリスト教徒の共同体と共存していたとしながらも、都市当局がキリスト教世界としての「聖なる都市」の観念を用いて「ユダヤ人の追放の正当性」(84 頁)を主張したこと、そしてユダヤ人が法的地位を獲得した後も「頻繁にポグロムを被っていた」(267 頁)というハーファークンプの指摘からも明らかだろう。

以上のような「聖なる」共同体および公共性のあり様は、本書がトリーアやケルンなどといったドイツの司教都市を主な対象としたからこそ浮かび上がった新たな一面であるといえよう。だがそれゆえに彼の提示した共同体像は、宗教という側面のみを切り取ったものとなっており、宗教による統合および共生の側面が強調され、共同体の持つ排除といった負の側面が見えにくくなってしまっている印象が否めない。これに関して本書の中でハーファークンプは、ユダヤ人だけでなく「貧しいキリスト教徒の住民から手工業の徒弟までが排除されていた」(267 頁)ことを指摘している。こうした指摘から、ハーファークンプ自身、必ずしも都市住民全員がキリスト教による基盤の上に零れ落ちることなく立っていたわけではないと考えていたことは言うまでもない。こうしたことを考慮すると、キリスト教という枠組みのみで都市住民を一様に捉えることには限界があるといえる。ハーファークンプの議論の中では都市内部の社会階層という側面からの公共性への言及があまりなされていないのはこのためだろう。宗教的な基盤に立脚した都市共同体像を踏まえつつも、ハーファークンプが触れた都市における排除の側面、例えば都市を構成する住民諸階層、とりわけ市民権を持たず都市内部で排除の対象となった社会階層の公共性にお

ける位置づけにも改めて目を向ける必要があるといえよう⁹。これらのことを通して、「公共性」が排除の枠組みとなりうるという側面を検討できる。中世後期になると、政治参加や政策の改善をめぐる都市内部での紛争によって表面化した社会階層間の対立とその後の調停が、既存の統治構造や統治の正統性を揺るがすこともしばしばあった。このような都市の動揺が都市共同体の基盤たる聖性の観念にどのような影響をもたらしたのかという点も、中世の公共性を理解するために考えるべき問題である。その表れの一つとして、修道院や教会といった聖界諸団体が経済的基盤や特権を確立していく中世末期から近世までの過程において、次第に都市住民を経済的に圧迫する支配的な社会集団となっていくことが挙げられる¹⁰。この漸次的な変化によって生じた社会階層間の隔たりや対立、闘争は共同体の基盤としての「聖なる都市」の観念を揺るがし、公共性の性質の変容をもたらしたと捉えられる。こうした社会的状況下で排除の憂き目にあった諸階層と共同体の基盤としての聖性との関係性を論じることが、もともとと托鉢修道会の文書や説教によって啓発された概念として現れた共同体の共通利害としての公共善の変化¹¹、さらには都市の統治権力の正統性にまつわる議論にも関わってくるだろう。また、このような点からキリスト教によって保証された統治の正統性が都市の諸階層にいかに関与したのかを考えることは、キリスト教による公共性に内在した排除のシステムを考えることにもつながる。これらのことを検討するにあたり、ハーファークンプの打ち出した都市における宗教性が時代とともにどのように組み換えられていったのかを解明することは中近世にかけての公共性の変容を把握する上で重要な事柄となるだろう。

ハーファークンプの議論は、従来の共同体論ではあまり注目されてこなかった都市の聖性という側面から都市共同体がキリスト教という紐帯のもとで統合され、公共性を創出していたことを明らかにし、中世都市の新たな姿を描き出した。そこでなされたハーファークンプの中世における公共性にまつわる議論は、ハーバーマスおよびそれ以降の公共性の議論では見落とされがちであったキリスト教を基盤に据えた中世ヨーロッパ世界にスポットを当て、それまで見えてこなかった新たな中世の公共性像を示した。これは、近代以降に用いられてきた公共性概念を中世の宗教性に重ねるものであり、公共性に関する議論の幅を中世にまで広げることを可能にしたといえる。ハーファークンプは14世紀半ば以降、「お上として発達してきた都市参事会が日常生活を規範化する傾向を強めていった」（289頁）ことを指摘しているが、これはキリスト教を基盤とした都市共同体の公共性に大きな影響をもたらしたと見做すことができる。これにより統治権力がその正統性の保証としての宗教から独立し、中世から近世へと移行する中に、「聖なる都市」

⁹ マルク・ボーネは、同性愛者に関する高い数の有罪判決や追放といった処分から、都市が「排除、周縁化、最後には根絶の道具」となりえたことを指摘した（マルク・ボーネ / ブルゴーニュ公国史研究会訳『中世末期ネーデルラントの都市社会—近代市民性の史的探求—』八潮社、2013年、156頁）。

¹⁰ 小倉欣一『ドイツ中世都市の自由と平和』勁草書房、2007年、224頁；Andrea Iseli, *Gute Policey. Öffentliche Ordnung in der Frühen Neuzeit*, Stuttgart 2009, S. 19.

¹¹ ボーネ前掲書、143頁。

という基盤の変化が生じたといえる。都市史の観点で見れば、中世と近世の公共性の大きな分水嶺として中世後期に頻発した都市騒擾および近世の宗教改革を再解釈することができる。例えば、宗教改革期において多くの都市で、これまでキリスト教諸施設が行ってきた貧民救済を都市当局が行うようになり、それにあたり貧民の再編がなされたという研究もある¹²。こうした出来事も、都市の基盤や統治の正統性および公共性の変化という側面から検討すべき対象となりうる。この点において、ハーファークンプは中世から近世以降の都市自治論や近代市民社会にまつわる議論に到達しうるような大きな議論を展開させたといえるだろう。以上のことから、本書においてハーファークンプが行った公共性に関する議論は、ハーバーマス以来積極的にはなされてこなかった中世の公共性を検討し、さらに近代の公共性への重要な橋渡しとなるだろう。

¹² Anja Johann, *Kontrolle mit Konsens. Sozialdisziplinierung in der Reichsstadt Frankfurt am Main im 16. Jahrhundert*, Frankfurt a. M. 2001, S. 115.